

行動ステージを用いたコミュニティでの HIV 予防啓発活動の評価 -大阪地域でのゲイ向け商業施設利用者への質問紙調査から-

研究協力者：金子典代¹⁾、大森佐知子¹⁾、木村博和²⁾、辻宏幸³⁾、鬼塚哲郎⁴⁾、市川誠一¹⁾

1)名古屋市立大学大学院看護学研究科 2)横浜市南福祉保健センター 3)財団法人エイズ予防財団リサーチレジデント/MASH 大阪 4)京都産業大学/MASH 大阪

研究要旨

本研究の目的は、1) 大阪地域のゲイ・バイセクシュアル男性におけるコンドーム使用の行動ステージの分布を明らかにすること、2) 行動ステージと検査行動、知識、感染リスク認識、ゲイ CBO の予防介入プログラムへの接触、HIV 感染予防への態度や規範の関連を明らかにすることである。質問紙調査はゲイ CBO が啓発資材を配付している商業施設の協力を得て実施し、601 件の有効回答を得た。コンドーム使用の行動ステージは 1) 無関心期、2) 関心期/準備期、3) 行動期/維持期の 3 群に分類した。行動ステージ別の検査受検、知識や感染リスク認識、ゲイ CBO のプログラムとの接触、HIV 感染予防への意識、態度や規範との関連を分析した。ゲイ CBO が配布した啓発資材の受け取り率は、全てのステージ群において 70-80%を超えていたが、勉強会や啓発イベント等への参加や認知、検査受検は、行動/維持期のものの方が他のステージより高かった。HIV 感染予防への態度、規範は、行動ステージと有意な関連が見られ、“周囲でコンドームを使用する友達が多くなった”といった規範を感じているものは維持期に多かった。また、HIV 感染の楽観視を身近に感じているものほど、その場限りの相手とのコンドーム使用において無関心期に近い行動ステージにあった。付き合いが長くなった時、ドラッグやアルコール使用時はコンドーム使用が困難に感じると回答したものの方が、無関心期に多かった。対象者におけるステージの分布と、各ステージ群別のゲイ CBO プログラムの浸透度を経年的に測定することで、介入が届いていない層の明確化と、予防啓発の評価が可能になると考えられる。

A. 研究目的

MASH 大阪では大阪地域の MSM (men who have sex with men)、堂山・新世界地域のゲイバーの利用者にターゲットをあて、コンドーム配布活動やエイズや性感染症に関する情報を盛り込んだコミュニティペーパー SaL+ (MASH 大阪の啓発プログラムであるアウトリーチ資材のひとつで、コミュニティ情報に HIV/STI の予防情報をくるんだコミュニティ情報誌のこと、通称サルポジ、以下コミュニティペーパー SaL+とする) の配布活動を行ってきている。また、

これらの予防介入プログラムが HIV 抗体検査受検行動や HIV 感染予防行動にどのように影響しているか継続的な評価を行うため、ゲイ向けクラブイベントにおいて質問紙調査を 1999 年より継続的に実施してきた。しかし、これらのクラブイベントで実施する調査における質問項目数には限界があることや、クラブイベントの調査では回答者はクラブイベントの参加者となり、MASH 大阪が行ってきた介入プログラムの直接のターゲット層であるゲイバーの顧客と完全には一致していないという限界があった。そこで 2005 年はこれまで

MASH 大阪の予防プログラムの主のクライアントとしてきた堂山・新世界地域のゲイバーの利用者にむけた精密質問紙調査を実施した。質問項目には、過去のクラブイベント調査において用いた項目に加え、MASH 大阪のアウトリーチコンドームの受け取り経験と使用頻度、MASH 大阪のコミュニティーペーパー (SaL+) の購読内容と購読頻度、性感染症の既往、過去 6 ヶ月間のコンドーム使用、アルコール・ドラッグの使用、コミュニティーにおける HIV 感染予防行動の規範などについてもたずねた。特に、過去 6 ヶ月間のコンドーム使用行動に関する質問項目では、従来用いていた相手別のコンドーム使用頻度のみでなく、行動の変容段階(変化ステージ)という概念を取り入れた項目を取り入れた。この行動の変化ステージという概念では、対象者が望まれる行動を行っているかいないのかという行動の有無という側面に着目するのではなく、行動を維持できるまでにいたるプロセスや行動変容への意思も組み入れて行動をみる概念である。この概念を用いることにより、コミュニティーにおける行動変化ステージの様相を明らかにできるとともに、各変化ステージの層にどの程度予防介入が行き届いているのかを明確にでき、コミュニティーへの介入の効果を評価する上での指標となることが考えられる。

本研究の目的は以下の 2 点である。

1. 大阪地域の商業施設(ゲイバー)を利用するゲイ・バイセクシュアル男性におけるコンドーム使用の行動ステージの分布を明らかにすること
2. 行動ステージと検査行動、知識、感染リスク認識、HIV 感染者の身近さ、MASH 大阪の HIV 感染予防介入プログラムへの接触、HIV やエイズ予防への態度や規範の関連を明らかにすること

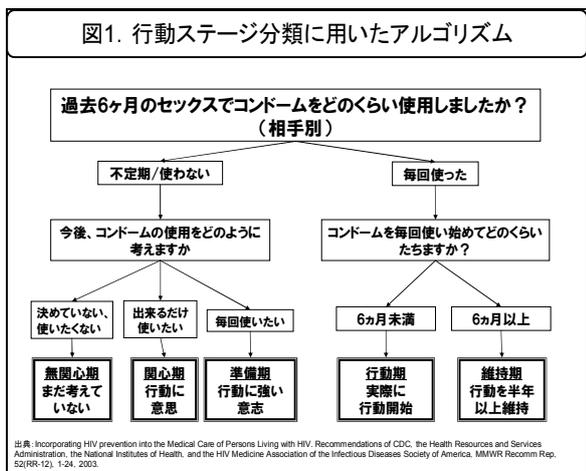
B. 研究方法

MASH 大阪がコミュニティーペーパー SaL+ および啓発用コンドームを毎月配布している商業施設に調査協力を依頼し、調査協力の同意が得られた 41 店舗に 1340 部の質問紙配布を依頼した。質問紙の配布・回収方法については、商業施設のオーナーから顧客への直接手渡しを依頼し、顧客からは直接郵送にて質問紙を回収する方法をとった。また MASH 大阪ドロップインセンター DISTA においても来場者に質問紙を配布し、直接郵送法にて質問紙を回収した。対象者には謝礼として商業施設で使用可能なチケットと抽選でアンダーウェアが当選する仕組みとした。全有効回答数は 601 (回収率 56.6%) であった。質問紙構成は (1) 基本属性、(2) MASH 大阪が行っている予防介入プログラムへの接触状況、(3) HIV 感染予防に関連する知識および意識、(4) HIV 抗体検査受検、(5) 性感染症の既往、(6) 性行為経験およびコンドームの使用頻度、(7) 性交時のアルコールおよびドラッグ使用の状況など全 40 問であった。本報告では、20 歳以上の自らの性指向をゲイまたはバイセクシュアル、わからないと自認している、または男性と性行為の経験があると回答した 546 名の回答のみを分析の対象とした。

コンドーム使用の行動ステージは、米国にてエイズ予防の分野でも活用されているアルゴリズム (図 1) を用いて、過去 6 ヶ月のコンドームの使用状況と今後のコンドーム常用の意図により、無関心期、関心期、準備期、行動期、維持期の 5 段階に特定、その場限りの相手別に分類した。本研究では、5 つのステージのうち、関心期と準備期、行動期と維持期はそれぞれ一つにまとめ、無関心群、関心/準備期群、行動・維持期群の 3 群に分類した。

相手種類別の、各行動ステージ別の過去 1 年間 HIV 抗体検査受検率、MASH 大阪の予防介入プログラムの接触・認知率、HIV 感染予防の規範や価値観との関連を分析した。データ

の集計および統計処理には SPSS11.5J (Windows)を用いた。



C. 結果

1) 対象者の基礎属性

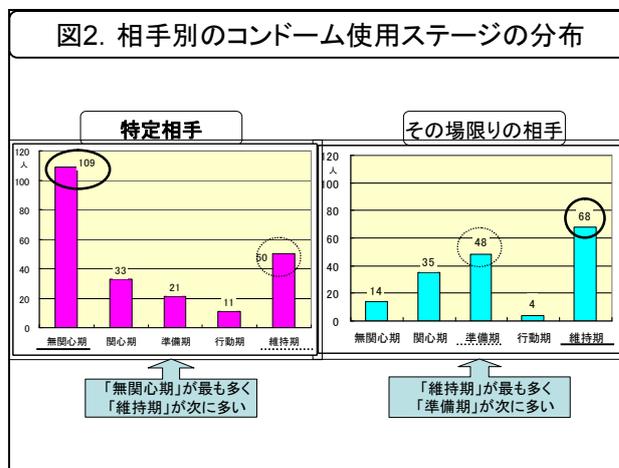
本研究の対象者の年齢層の分布は別表 1 の通りである。平均年齢は 33.9(±9.9)歳であり、最少年齢は 20 歳から最高年齢は 72 歳であった。本調査では比較的幅広い年齢層よりなる年齢の偏りの少ない対象者からの回答を得ることが可能であった。

2) コンドーム使用、意図、行動ステージ (別表 2)

特定相手、その場限りの相手別に過去 6 ヶ月のアナルセックス時のコンドーム使用頻度、今後毎回コンドームを使用する意図を尋ねた。過去 6 ヶ月に特定相手とアナルセックスをした 316 名のうち、コンドームを毎回使用したものは、86 名 (33.1%)、その場限り相手とアナルセックスをした 183 名のうち、コンドームを毎回使用したものは、79 名 (43.2%) であり、常用率はその場限りの相手とのアナルセックス時の方が高かった。過去 6 ヶ月アナルセックスの経験があったものに限定し、今後毎回コンドームを使用する意図を尋ねたところ、特定相手と毎回使用したいと回答した者は 86 名 (34.0%)、その場限り相手とは 120 名 (65.6%) が「毎回使用したい」と回答し、

いずれの相手においても「毎回使用したい」と回答した者が最も多かった。

コンドーム使用ステージの分布は、特定、その場限りのアナルセックスの相手別に異なり、特定相手とのアナルセックスにおけるコンドーム使用ステージは無関心期に最も多く 41.9%を占めており、次に維持期にあるものが 2 番目に多く 19.2%であった。その場限りの相手とのアナルセックスにおいては維持期にあるものが 37.2%と最も多く、準備期にあるものが 26.2%と 2 番目に多かった。(図 2)



3) 特定相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、予防プログラムへの接触 (別表 3)

過去 1 年の検査受検、感染リスク認識、HIV の身近さ、知識、MASH 大阪のプログラムと相手別のコンドーム使用ステージとの関連を分析した。特定相手とのアナルセックスのコンドーム使用ステージとは、HIV 感染リスク認識、MASH 大阪プログラムの認知、HIV 予防啓発イベント PluS+への参加の間に有意な関連が見られた。傾向性の検定では、感染リスク認識にのみ有意な関連が見られ、HIV に感染するリスク認識が五分五分または十分可能性があるという回答したの方が、無関心期にあるものの割合が高かった。アウトリーチを行っているコンドーム、啓発情報誌 SaL+の受け取

り・購読率はいずれの行動ステージにおいても高く 70-80%を超えていた。

4) その場限りの相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、ゲイ CBO の予防プログラムへの接触 (別表 4)

その場限りの相手とのコンドーム使用ステージについては、過去 1 年 HIV 抗体検査受検、HIV 感染リスク認識、コミュニティセンター dista の認知に有意な関連がみられた。傾向性の検定では、過去 1 年受検経験、HIV に感染するリスク認識に関連が見られた。過去 1 年に検査経験があるものの方が、また HIV に感染するリスク認識がまったく/ほとんどないと回答した者の方が、行動・維持期にある傾向にあった。

5) 特定相手とのコンドーム使用ステージと HIV 感染予防に対する態度、規範 (別表 5)

特定相手とのコンドーム使用ステージと、HIV 予防に対する態度、周囲の規範の関連を調べた。「相手がコンドーム無しでセックスすることを望んだらコンドームをつけようといえなくなる」「付き合いが長くなるほどコンドームを使わなくなる」「ドラッグ使用時やお酒に酔っているときはコンドームを使ったセックスが難しい」といったコンドーム使用が難しくなる要因に関して「そう思う」と回答した人の方が有意に無関心期に近い行動ステージにあることが明らかになった。「どんなときでもコンドームを使ったセックスが出来ると思う」といったコンドーム使用の自信があるものの方が、より維持期に多い傾向にあった。「以前と比べてコンドームを使うゲイの友達が多くなった」周囲のコンドーム使用状況が予防に支援的な状況に対して「そう思う」と回答した人の方がより維持期に近い行動ステージにあった。

6) その場限りの相手とのコンドーム使用ステージと HIV 予防に対する態度、規範 (別表 6)

その場限りの相手とのコンドーム使用ステージとの関連については、特定相手とのコンドーム使用ステージで明らかになった関連要因と同じく「相手がコンドーム無しでセックスすることを望んだらコンドームをつけようといえなくなる」「付き合いが長くなるほどコンドームを使わなくなる」「ドラッグ使用時やお酒に酔っているときはコンドームを使ったセックスが難しい」といったコンドーム使用が困難に対して「そう思う」と回答した人の方が有意に無関心期に近い行動ステージにあった。「どんなときでもコンドームを使ったセックスが出来ると思う」「以前と比べてコンドームを使うゲイの友達が多くなった」と回答した者の方が、より維持期に多かった。

また、特定相手とのコンドーム使用ステージとは関連がみられなかったが、その場限りの相手とは「コンドームをつけるとエイズなどの病気を心配せずにセックスを楽しめる」「今はエイズになっても薬で長く生きる事が出来るため、コンドームなしのセックスに不安を持たない人が多い」と回答した人の方がより無関心期に近い行動ステージにあった。

D. 考察

本研究の対象者の背景については、年齢層の高いゲイ・バイセクシュアル男性が利用するゲイバーを含む 40 店舗からの協力へ得たことにより、過去に大阪地域で実施した調査と比較して、年齢層が高い層からの回答協力を得る事が可能となった。

コンドーム使用行動については、過去 6 ヶ月の使用頻度は、特定相手と常用していたものは 33.1%、その場限りの相手とは 43.2%であり、特定相手とは使用率が低い事が示された。また、コンドーム使用の行動ステージの分布はセックスの相別に異なり、その場限

りの相手とのコンドーム使用においては、維持期にあるものが 37.2% と最も多かったのに対し、特定相手との行動ステージについては、無関心期が 41.9% と最も多いことが明らかとなった。今後のアナルセックスにおいて毎回コンドームを使用する意図に関しては、特定、その場限りの相手いずれにおいても、「毎回/できるだけ使用したい」と回答したものが最も多かったが、行動ステージの分布を見ると、無関心期に近いものが多かった。特定相手とのアナルセックス時にもコンドームを「使用したい」と思いながらも、なぜ実際のセックスの場面では使用できないのか、その詳細な阻害要因や「使用したい」と思いながらも使えなかった状況の詳細について、また、どのような支援や環境があれば特定相手との使用が促進するのかを質的調査などから明らかにし、阻害要因を減らすための介入や環境整備を考えていく必要がある。

アナルセックスの相手の種類にかかわらずゲイ CBO 活動の認知やイベントの参加率は無関心期のものにおいて最も低かった。ゲイ CBO が配布するコンドームや予防情報誌の受け取り率はいずれの行動ステージにおいても 70-80% と全般的に高かった。予防情報誌には、HIV 抗体検査や HIV 感染予防、ゲイ CBO の予防啓発プログラムに関する情報が掲載されているため、多くのものがこれらの情報に接する機会があることが考えられる。しかし、啓発資材の全般的な受け取り経験は高いにもかかわらず、実際のプログラムやコミュニティーセンターの認知は低いことが明らかとなった。ゲイ CBO のプログラムやコミュニティーセンターを認知することで、プログラムに参加したり、コミュニティーセンターを訪れる層も存在することが考えられる。したがって、現在情報誌を受け取りながらも認知が少ない層において、予防や予防啓発プログラム

に関する情報は意図的に避けられてしまうのかなど、実際のプログラムの認知が低い理由を明らかにし、どのような情報提示の方法が無関心期の層にも届くために効果的なのかを明らかにしていく必要がある。

本調査では、HIV 感染予防に対する考え方、態度、規範についても尋ね、アナルセックスの相手別のコンドーム使用の行動ステージとの関連を分析した。その結果、特定、その場限りの相手双方の場合において「相手がコンドーム無しでセックスを行うことを望んだらコンドームをつけようといえなくなる」、「付き合いが長くなるとコンドームを使用しなくなりがちである」、「ドラッグやアルコール飲用時はコンドームの使用が難しい」といった考えに同意するものの方が、無関心期のステージにいる割合が高いことが明らかとなった。これらはいずれもセックスの場面での状況、相手との関係性、アルコールや薬物の使用によりコンドーム使用が難しくなることを示しており、個人レベルでの知識、感染リスク認識の向上に働きかける介入だけでは限界がある事を示唆している。相手が使用を望まなかったときにコンドームを使用するための対処法や交渉パターンの検証、パートナーとの交際期間が長くなると、どのような状況、要因からコンドーム使用が難しくなるのかといった不使用に至るプロセスをより詳細に検討し、使用が困難になりがちな状況においてもコンドーム使用の定着が促進するための対策を考えていく必要がある。

「以前よりコンドームを使うゲイの友達が多くなった」という周囲の予防行動の規範は特定相手、その場限り相手とも、コンドーム使用ステージと有意に関連しており、この予防に支持的な規範を感じているものの方がより維持期に近い行動ステージにいる傾向にあった。今後は、コンドーム使用に全く行動に関心がない無関心層にアクセスする方法、またこれらの無関心層をとりまく規範を変え

るためにはどこにアプローチし、どのような方法が効果的なのかを明らかにし、有効な介入を実施することが求められる。

「エイズ治療薬の出現により感染の不安を持つものが減ってきた」という考えに同意するものの方が、その場限り相手とのコンドーム使用において、無関心期に近い行動ステージに多くいることが明らかとなった。多剤併用のエイズ治療薬の出現により、延命が可能となったことで HIV 感染を楽観視するものが増加していることは西欧諸外国でも問題となっているが、日本でもこのような状況が増えることは十分に考えられる。治療薬によって延命は可能になったものの、HIV 感染症やエイズの治療において服薬は一生続ける必要があることや、様々な副作用の問題を正しく伝えるといった、HIV 感染症やエイズへの楽観視を低減するための方法を考える必要がある。

ゲイ CBO が予防啓発のアウトリーチ活動を行っている商業施設からの協力を得て、直接利用者に対して実施する大規模な精密な質問紙調査はわが国でも初めての試みであったが、60%以上の回収率により 601 件の回答を得ることが可能であった。今後も対象者への調査の周知方法や質問紙に改良を重ねることで、回収率の向上や年齢層の高い層からの更なる回答協力を得ることが可能になると考えられる。同様の質問紙調査を経年的に実施し、予防行動、検査受検行動、行動ステージとこれらの関連要因の実態を把握することで、ゲイ・バイセクシュアル男性に対するより詳細な HIV/STI 感染予防啓発活動の評価や予防サービスのニーズの明確化が可能になることが考えられる。この研究成果を踏まえ、予防活動の達成度の評価を継続的に実施し、介入が行き届いていない層を明確化するとともに、その層に対していかに効果的に働きかけるかを考案していく必要がある。またコンドー

ム使用の行動ステージに関連する要因をより明確にし、より対象者を維持期に向かうことを支援するにはどのような要因に働きかけることが効果的なのかを考慮に入れた予防活動を実施することが望まれる。

E. 発表論文等

研究論文等

1. 金子典代, 市川誠一, 辻宏幸, 後藤大輔, 塩野徳史, 鬼塚哲郎: 現場で使える! 健康教育ツールを開発しよう 第3回 計画(2): ツールをらせるものにするための最後の押さえどころ—MASH 大阪による健康教育資材の紹介, 保健師ジャーナル, 63(12), 1142-1149, 2007
2. 金子典代, 市川誠一, 辻宏幸, 鬼塚哲郎: 現場で使える健康教育ツールを開発しよう 第4回 作成: 対象者にひびくメッセージを作ろう, 保健師ジャーナル, 44(1), 82-89, 2008

国際学会発表

1. Noriyo Kaneko, Sachiko Omori, Hirokazu Kimura, Hiroyuki Tsuji, Tetsuro Onitsuka, Seiichi Ichikawa. The relation between gay bar customers' condom use and recognition of local prevention activities, The 8th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, Sri Lanka, 2007, Colombo.

国内学会発表

1. 金子典代, 大森佐知子, 木村博和, 辻宏幸, 鬼塚哲郎, 市川誠一: 大阪地域の予防介入プログラムの評価と HIV 感染予防行動の関連要因に関する研究, 日本エイズ学会, 2006 年, 東京

別表 1. 対象者の背景 (N=546)

	n	(%)
年齢		
29 歳未満	203	(37.2)
30 歳～39 歳	210	(38.5)
40 歳以上	122	(22.3)
無回答・非該当	11	(2.0)
性的指向		
ゲイ	475	(87.0)
バイセクシュアル	55	(10.1)
その他/分からない	11	(2.0)
無回答・非該当	5	(0.9)
居住地		
大阪府	380	(69.6)
大阪府をのぞく関西圏	125	(22.9)
その他	37	(6.8)
無回答・非該当	4	(0.7)
男性との過去 6 ヶ月のアナルセックス経験		
あり	316	(60.4)
なし	203	(38.8)
無回答	4	(0.8)
過去 6 ヶ月の特定相手とのアナルセックス経験¹⁾		
あり	260	(47.6)
なし	260	(47.6)
無回答	3	(0.6)
過去 6 ヶ月のその場限りの相手とのアナルセックス経験¹⁾		
あり	183	(33.5)
なし	337	(61.7)
無回答	3	(0.6)
過去 1 年間での HIV 抗体検査受検経験		
あり	154	(28.2)
なし	389	(71.2)
無回答・非該当	3	(0.5)
STI の罹患経験		
あり	161	(29.5)
なし	381	(69.8)
無回答・非該当	4	(0.7)

注¹⁾ 生涯に男性とアナルセックスをしたもの523名のみ対象

別表 2. 性行動、相手別コンドーム使用の行動ステージ (N=260)

項目	n	(%)
特定相手との過去 6 ヶ月のコンドーム使用頻度¹⁾		
毎回使用 (100%)	86	(33.1)
時々 (25-75%)	60	(23.1)
ほとんど～全く使用しなかった (0%)	108	(41.5)
無回答・特定相手とはしていない	6	(2.3)
特定相手と今後のコンドーム使用の意図²⁾		
毎回・出来るだけ使いたい	129	(49.6)
あまり使いたくない・使いたくない	103	(39.6)
決めていない	21	(8.1)
無回答・非該当	7	(2.7)
特定相手とのコンドーム使用ステージ¹⁾		
無関心期	109	(41.9)
関心期	33	(12.7)
準備期	21	(8.1)
行動期	11	(4.2)
維持期	50	(19.2)
無回答・非該当	36	(13.8)
その場限り相手との過去 6 ヶ月のコンドーム使用頻度³⁾		
毎回使用 (100%)	79	(43.2)
時々 (25-75%)	54	(29.5)
ほとんど～全く使用しなかった (0%)	40	(21.9)
無回答・非該当	10	(5.5)
その場限り相手とのコンドーム使用の意図²⁾		
毎回・出来るだけ使いたい	269	(88.5)
あまり使いたくない・使いたくない	16	(5.5)
決めていない	17	(4.4)
無回答・非該当	3	(1.6)
その場限り相手とのコンドーム使用ステージ³⁾		
無関心期	14	(7.7)
関心期	35	(19.1)
準備期	48	(26.2)
行動期	4	(2.2)
維持期	68	(37.2)
無回答・非該当	14	(7.7)

注¹⁾ 特定相手と過去6ヶ月にアナルセックスを行った者のみを対象

注²⁾ 過去6ヶ月間にセックス経験があるものを対象

注³⁾ その場限り相手と過去6ヶ月にアナルセックスを行った者のみを対象

別表 3. 特定相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、予防プログラムへの接触

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ²⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
過去 1 年の HIV 抗体検査受検							
あり	36	(33.3)	21	(38.9)	25	(41.0)	0.572
なし	72	(66.7)	33	(61.1)	36	(59.0)	0.106
HIV に感染する可能性の認識							
絶対・ほとんどない	38	(40.9)	16	(31.4)	37	(67.3)	0.000
五分五分・十分可能性がある	55	(59.1)	35	(68.6)	18	(32.7)	0.005
HIV 陽性者の友人・知り合い							
あり	35	(32.7)	14	(26.4)	22	(36.7)	0.504
なし	72	(67.3)	39	(73.6)	38	(63.3)	0.784
HIV 感染予防の知識							
6 問中 4 問以上正答	25	(23.1)	13	(24.1)	14	(23.0)	0.988
6 問中正答 3 問以下	83	(76.9)	41	(75.9)	47	(77.0)	0.441
MASH 大阪プログラムの認知³⁾							
いずれか認知	31	(29.0)	26	(49.1)	21	(35.6)	0.044
すべて認知なし	76	(71.0)	27	(50.9)	38	(64.4)	0.170
コミュニティセンターの認知							
知っている	25	(22.9)	20	(37.0)	16	(26.7)	0.163
知らない	84	(77.1)	34	(63.0)	44	(73.3)	0.351
予防啓発イベントの参加							
参加	8	(7.4)	11	(20.4)	10	(16.7)	0.041
参加せず	8	(92.6)	11	(79.6)	50	(83.3)	0.035
MASH 大阪のコンドームキットの受け取り							
あり	79	(72.5)	41	(75.9)	48	(78.7)	0.658
なし	30	(27.5)	13	(24.1)	13	(21.3)	0.361
MASH 大阪の啓発情報誌 SaL+持ち帰り							
あり	47	(72.5)	31	(81.5)	32	(75.4)	0.454
なし	32	(27.5)	10	(18.5)	14	(24.6)	0.495

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる

注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す

注³⁾ コミュニティセンターで行われている 10 種類の予防啓発プログラムの認知についてたずね、1 つ以上認知していたもの、いずれも認知していなかったものの 2 群に分類した

別表 4. その場限り相手とのコンドーム使用ステージと関連要因、予防プログラムへの接触

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ²⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
過去 1 年の HIV 抗体検査受検							
あり	0	(0.0)	21	(37.5)	25	(48.1)	0.006
なし	10	(100.0)	35	(62.5)	27	(51.9)	0.006
HIV に感染する可能性の認識							
絶対・ほとんどない	2	(25.0)	7	(13.2)	21	(43.81)	0.003
五分五分・十分可能性がある	6	(75.0)	46	(86.8)	27	(56.3)	0.007
HIV 陽性者の友人・知り合い							
あり	4	(40.0)	20	(36.4)	14	(27.5)	0.780
なし	6	(60.0)	35	(63.6)	37	(72.5)	0.211
HIV 感染予防の知識							
6 問中 4 問以上正答	6	(66.7)	43	(76.8)	38	(73.1)	0.780
6 問中正答 3 問以下	3	(33.3)	13	(23.2)	14	(26.9)	0.655
MASH 大阪プログラムの認知³⁾							
いずれか認知	1	(11.1)	24	(42.9)	13	(26.0)	0.063
すべて認知なし	8	(88.9)	32	(57.1)	37	(74.0)	0.779
コミュニティーセンターの認知							
知っている	0	(0.0)	22	(39.3)	15	(28.8)	0.042
知らない	10	(100)	34	(60.7)	37	(71.2)	0.354
予防啓発イベントの参加							
参加	0	(0.0)	8	(14.3)	9	(17.3)	0.361
参加せず	10	(100.0)	48	(85.7)	43	(82.7)	0.358
MASH 大阪のコンドームキットの受け取り							
あり	7	(70.0)	45	(80.4)	39	(75.0)	0.687
なし	3	(30.0)	11	(19.6)	13	(25.0)	0.838
MASH 大阪の啓発情報誌 SaL+の持ち帰り							
あり	8	(80.0)	45	(80.4)	40	(76.9)	0.905
なし	2	(20.0)	11	(19.6)	12	(23.1)	0.538

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる

注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す

注³⁾ コミュニティーセンターで行われている 10 種類の予防啓発プログラムの認知についてたずね、1 つ以上認知していたもの、いずれも認知していなかったものの 2 群に分類

別表 5. 特定相手とのコンドーム使用ステージと HIV 感染予防に対する態度、規範

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ²⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
コンドームをつけると、エイズなど病気を心配せず に安心してセックスを楽しめる							
そう思う	92	(84.4)	48	(88.9)	55	(91.7)	0.159
思わない	17	(15.6)	6	(11.1)	5	(8.3)	0.370
相手がナマ(コンドームなし)でのセックスを望ん だら、コンドームをつけようと言えなくなる							
そう思う	66	(61.1)	23	(42.6)	13	(21.3)	<0.001
思わない	42	(38.9)	31	(57.4)	48	(78.7)	<0.001
付き合いが長くなると、コンドームを使うセックス をしなくなりがちである							
そう思う	95	(87.2)	38	(70.4)	27	(44.3)	<0.001
思わない	14	(12.8)	16	(29.6)	34	(55.7)	<0.001
どんな時であっても、コンドームを使ったセック スができると思う							
そう思う	41	(38.3)	36	(66.7)	51	(83.6)	<0.001
思わない	66	(49.5)	18	(50.9)	10	(24.6)	<0.001
ドラッグ使用時やお酒に酔っている時は、コンド ームを使ったセックスをするのが難しい							
そう思う	54	(49.5)	27	(50.9)	15	(24.6)	0.006
思わない	55	(50.5)	26	(49.1)	46	(75.4)	0.003
エイズは薬で延命が可能となりコンドームなしの セックスに不安を持たないゲイの友達が多い							
そう思う	36	(33.0)	18	(34.0)	19	(31.1)	0.846
思わない	73	(67.0)	35	(66.0)	42	(68.9)	0.947
以前よりコンドームを使うゲイの友達が多くなっ た							
そう思う	54	(50.0)	41	(77.4)	48	(78.8)	<0.001
思わない	54	(50.0)	12	(22.6)	13	(21.3)	<0.001
以前よりゲイの友達の間では、HIV に対する 偏見がなくなってきた							
そう思う	56	(51.9)	34	(63.0)	35	(57.4)	0.348
思わない	52	(48.1)	20	(37.0)	26	(42.6)	0.395

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す

別表 6. その場限り相手とのコンドーム使用ステージと HIV 感染予防に対する態度、規範

項目	無関心期		関心期/ 準備期		行動期/ 維持期		p 値 ¹⁾
	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	n ¹⁾	(%)	
コンドームをつけると、エイズなど病気を心配 せずに安心してセックスを楽しめる							
そう思う	8	(57.1)	68	(85.0)	67	(90.5)	0.014
思わない	6	(42.9)	12	(15.0)	7	(9.5)	0.006
相手がナマ(コンドームなし)でのセックスを望ん だら、コンドームをつけようと言えなくなる							
そう思う	10	(71.4)	42	(52.5)	18	(24.0)	<0.001
思わない	4	(28.6)	38	(47.5)	57	(76.0)	<0.001
付き合いが長くなると、コンドームを使うセックス をしなくなりがちである							
そう思う	14	(100)	61	(76.3)	32	(43.8)	<0.001
思わない	0	(0)	19	(23.8)	41	(56.2)	<0.001
どんな時であっても、コンドームを使ったセック スができると思う							
そう思う	5	(38.5)	36	(45.0)	58	(77.3)	<0.001
思わない	8	(61.5)	44	(55.0)	17	(22.7)	<0.001
ドラッグ使用時やお酒に酔っている時は、コン ドームを使ったセックスをするのが難しい							
そう思う	9	(64.3)	45	(56.3)	14	(18.9)	<0.001
思わない	5	(35.7)	35	(43.8)	60	(81.1)	<0.001
エイズは薬で延命が可能となりコンドームなし のセックスに不安を持たないゲイの友達が多い							
そう思う	8	(57.1)	25	(31.3)	18	(24.0)	0.041
思わない	6	(42.9)	55	(63.8)	57	(76.0)	0.045
以前よりコンドームを使うゲイの友達が多くなっ た							
そう思う	4	(30.8)	52	(65.0)	57	(78.1)	0.002
思わない	9	(69.2)	28	(35.0)	16	(21.9)	0.003
以前よりゲイの友達の間では、HIV に対する 偏見がなくなってきた							
そう思う	11	(78.6)	46	(57.5)	39	(52.7)	0.160
思わない	3	(21.4)	34	(42.5)	35	(47.3)	0.201

注¹⁾ 欠損値を分析より除外したため総数が異なる注²⁾ 上段はカイ二乗検定、下段は傾向性検定の有意差を示す